

# 白藍塾オリジナル

## 2012入試小論文分析&解答のヒント

2012年3月発行

白藍塾の入試小論文分析は、他の予備校と違って、その問題に対して受験生がどのようにアプローチすればよいのかを具体的に説明している。そのため、この分析を参考にすれば、誰でも合格レベルの答案を書けるはずだ。該当の大学・学部の志望者は、ぜひ、これを読んで、自分で実際に答案を書いてみてほしい。

執筆・樋口裕一・大原理志・大場秀浩

### ●東大後期・総合科目Ⅲ

昨年度と違って、課題文の読み取りそのものはどちらもそう難しくないだろう。ただし、課題文を読み取るだけではダメで、一定の知識がなければ答えられないという点で、ここ二年ほどの傾向を引き継いでいる。幅広い知識と教養が求められているという点では、東大らしい問題と言えそうだが、ハードルはかなり高い。

第一問は、ワイマール時代からナチスの台頭期にかけて活躍したドイツの画家オットー・ディックスについて説明した文章。下層市民や戦場の様子をリアリスティックに描いた彼の芸術が、ナチス政権によって否定され、彼自身も社会的に抹殺されていく過程がくわしく説明されている。

問一は、ワイマール共和国の歴史を説明する問題。もちろん、これはある程度世界史の知識がないと答えようがない。ただし、課題文の中にもいくつかヒントがあるので、ある程度はそれらを参考にできる。

まず、押さえてほしいのは、ワイマール共和国というのは、第一次世界大戦での敗戦をきっかけに帝政から共和政に移行し、1930年代初頭にナチスが政権を掌握するまでの一時期のドイツの体制を指す用語だということ。第13段落の冒頭に「ワイマール共和国の民主的理念」とあるように、国民主権や普通選挙を謳ったきわめて民主的な憲法を持ち、福祉の充実など、社会民主主義的な政策を取ったことでも知られている。また、この時代は、文化的にも、ディックスに代表されるように、古い芸術から解放された自由な芸術が展開した時代でもある。

ところが、同じ段落にあるように、1925年半ば以降、建国以来の民主的理念はなしくずしにされ、1929年の世界大恐慌をきっかけに、ナチスが大きく台頭する。そして1930年代初頭にナチス政権が成立し、ヒトラーが総裁として独裁的な権力を握るようになって、

ワイマール共和国は事実上崩壊する。

500字以内と長いので、第一段落で共和国成立のきっかけを書き、第二段落でそれが変質していく過程、第三段落でナチス政権によるその崩壊を書くと、うまくまとまると思う。

問二は小論文問題だが、細かい条件が設けられていて、答えにくい。「芸術作品への政治的介入や利用の目的」というのは、要するに、国家の望む価値観に反する芸術を弾圧したり、逆にそれを肯定する芸術を支持することで、芸術作品の持つ国民への影響力を利用して、国民の意識を国家の望む方向へと向かわせるということだろう。「本文とは異なる例」としては、たとえば戦時中の日本で反戦的な芸術が弾圧されたり、逆に戦意高揚映画が作られて、国民を戦争へと駆り立てる手段としたことなどが挙げられる。

課題文は、明らかにそうした「芸術作品への政治的介入」を否定的に捉えているので、「芸術作品への政治的介入」が好ましいかどうかを問題提起することもできるが、これはイエスでは答えにくい問題なので、「好ましくない」という結論から始めるほうが書きやすいかもしれない。

問題点としては、「表現の自由が奪われる」「どんな芸術を愛好するかはその人の価値観の問題なのに、それを政府の価値観で統制するのは、多様な価値観の否定につながる」「政府に批判的な芸術を抑圧することで、大衆が政府を批判できなくしてしまう」などが挙げられるだろう。

いずれにせよ、500字しかないので、それほど深める必要はない。

第二問は、今年度も二問とも説明問題になっている。課題文は、前半では本地垂迹説が現れた歴史的背景について説明し、後半では仏教が普遍宗教として発展してきた歴史を簡単に説明している。課題文だけを読むとわかりにくいのが、前半の本地垂迹説は、問二の言う「普遍宗教（仏教）が基層信仰（神祇信仰）を包摂した例」として説明されているわけだ。

問一は、「日本における基層信仰の内容ないし性格」について説明する問題。「日本における基層信仰」というのは、「注」にもある神祇信仰（神や神社に対する信仰）のことだが、これを500字も使って説明するのはかなり難しい。

まず、「基層信仰」というのが体系化された宗教ではなく、その土地の民衆の生活の基盤となっている素朴な信仰形態であり、それが日本では神祇信仰であることを説明しよう。その上で、課題文から、「基層信仰」が一般的に、豊作や平穏、物質的繁栄などの現実的な利益を祈るものであること、それが呪術的な性格を伴っていることを確認しよう。さらに、現代の日本人は、表面的には無宗教に見えながら、年始参りをしたり、苦しいときの神頼みをしたりなど、そうした基層信仰が現在でも根強く残っていることを指摘するとよい。知識があれば、そうした基層信仰が、国家神道として体系化されて、戦時中の皇国思想の基盤となったことを説明するのもよいだろう。

基本型Aを応用して、最初に基層信仰の定義をはっきりさせた上で、いくつかのトピックに分けてそれをくわしく説明していくとよい。

問二は、「普遍宗教が基層信仰を包摂した例」を、仏教以外で説明することが求められている。これはつまり、普遍宗教の抽象的・普遍的な体系が、地域の呪術的な基層信仰を

取り込みつつ広がっていった過程を、仏教以外の例を使って示せばよいわけだ。

といっても、ほとんどの人はキリスト教以外に思いつかないだろうし、それも 500 字もの字数を使って説明するのはかなりハードルが高い作業だ。キリスト教は、ヨーロッパに広まる過程において、ゲルマン民族やケルト民族の基層信仰を取り込んでいるし、植民地化された地域でも、その土地の原始的な信仰を取り入れていっている。そうしたことを、知っている範囲で説明するしかない。

それ以外の例としては、儒教が道教などを取り込んだ例が挙げられる。

これも、書き方としては基本型Aを応用するといいたいだろう。

いずれにしても、どちらも課題文の中にほとんどヒントはなく、かなりの知識が要求される問題なので、相当難しいと言わざるを得ない。が、逆に言えば、これらの問題に完璧に答えられる受験生はほとんどいないはず。したがって、あきらめずに、自分の知っていることを何とか盛り込んでいくことが大切だ。

©執筆者の許可なく本紙の全部もしくは一部を無断転載、無断複写することを固く禁じます。

発行・白藍塾総合情報室 (03-3369-1179)

<http://www.hakuranjuku.co.jp>